

高校時代、同学年に王さんという人がいることは知っていたが、その人がどんな人かは全く知らなかった。それから 50 数年後にアメリカ在住のその人のお宅で数日を過ごすことになろうとは！

数年前に王さんがアメリカはミシガン州に居られることが同窓会幹事さんにどなたかから伝えられた。そしてご本人が大阪の同窓会にも東京のさぶろく会にも現れた。縁あって、大阪に滞在の折、王夫人の林さんやお子さんたちご家族にもお目にかかることになった。

奥様は東京生まれで、頭脳明晰、物事をテキパキと進めることのできる方で、波乱万丈の王さんの人生をよく支えて来られたこともわかった。

さて、私は、昨年亡くなった夫の親戚（日系アメリカ人になっている）や私の知人を訪ねて今年の 9 月にアメリカに旅する計画を立てていた。何気なくその行先などをメールで王夫妻に知らせたら、「そのコースで来るなら我が家はちょうどその中間地点に位置するので、是非ともお立ち寄りください」と言われた。平気でどこへでも訪ねて行ってしまおう私だが、幾等なんでもここ数年前に知り合いになった方のお宅に泊めていただくのは厚かましすぎると固辞したが、何回かやりとりして、結局お世話になることになった。

ミシガン州デトロイト空港にご夫妻でお迎えに来てくださり、1 時間ほどで郊外の広大な敷地のご自宅に到着。着いた日はレイバーデイ（9 月の第 1 月曜）とあって、次女（産婦人科医）のご一家が来ておられ、バーベキューを庭で楽しんだ。その夜から私が王夫妻に質問の嵐。来日時に断片的には伺っていたが、滞在中に王さんの来し方のあらかたを把握した。過去の艱難辛苦を忘れたかのように、常にニコニコして話をされ、大人（タイジン）の風格を感じた。日本・中国・アメリカと移動して、今は真のコスモポリタンとして生きておられる王夫妻に深い感銘を覚えた。別れの日、ご夫妻がまた空港まで見送って下さり「また是非来てください」と繰り返された。人との出会いの不思議を感じた日々であった。

（註）王さん夫妻が北京市内の岡の上に望郷亭という建物を寄贈されておられます。この建物を版画にした作品が国立民族学博物館（吹田市）に所蔵されており、いつでも見ることができます。

